何となれば是等の器具を携ふるときは、濫りに之を使用し、且つ抵抗を試みんとするの念を生じ易く、爲めに却つて不慮の災害を招くなど、其の例に乏しからず。若し之れ無んば、勢ひ抵抗すべきの念を絶ち、其の始めより、百方身を全うするの策を講ずるの外なきが故に、寧ろ危害を免るゝに庶からんかと思惟したればなり。

寂莫無人の境を跋渉し、猛虎月に吼ゆるの地を過るに、一の護身用具を携へざること、或は無謀と評する人も有らん。幸に予は全旅行中、一たび餓狼の群を見しこと有りしも、遂に虎には遭遇せしこと無かりき。聞く猛獸に遭遇せし刹那は、恰も見ざる如くに装ひ、平然前途に進むを避難の最良法とす。然るを若し逡巡注視せば彼れは却て己を圖ると信じ、先んじて人を害するに至ると。又聞く虎豹の毛は極めて燃燒し易ければ火を怖るゝ最も甚しと。予は此言を信じ、今回旅行の途次、蘆葦叢生する沼澤地、楡樹繁茂する森林帶を通過する時、怪しき物音、訝しき形影を見聞する毎に常に細心此の要領を服膺實施せり。又嘗て白頭山腹を横斷し、豆滿、鴨綠の水源地を跋渉したる際の如きは、殊に虎豹の類多しと聞き、露營には徹宵篝火を熾にし、其傍に安臥して何事なきを得たり。